

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520020

研究課題名(和文) 構成主義的アプローチによる行為論の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of the Theory of Action by the Constructivist Approach

研究代表者

岡部 勉 (Okabe, Tsutomu)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：50117339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ポール・グライスが最晩年に発表した構成主義的アプローチによる行為論の考え方は、ドナルド・デイヴィッドソンの自然主義を基調とするそれとはかなり違うものである。

本研究は、グライス行為論の形成過程を、グライス晩年の形而上学的著作及びバークレーのバンクロフト図書館に残された未発表原稿の調査を通して明らかにするとともに、構成主義的アプローチの現代的意義を明確にすることを目指した。行為論「行為と出来事」(1986)を含む形而上学的著作の翻訳は『理性と価値』(2013)として出版した。現代的意義については「グライス晩年の形而上学的思索」として口頭発表した。

研究成果の概要(英文)：The way of thinking of the theory of action by the constructivist approach of Paul Grice presented publicly in his latest period is quite different from that of Donald Davidson which is based on the naturalist way of thinking.

This research aimed to make the formation processes of Grice's theory of action clear through the investigations of his later period metaphysical writings and of the unpublished manuscripts which were left in the Bancroft Library of Berkeley and also to make clear the significance of the constructivist approach for modern theorists.

My own translation of his metaphysical writings including the paper 'Actions and Events' (1986) was published in 2013. The significance of the constructivist approach was presented orally as 'The Metaphysical Thinking of Paul Grice in his Later Period' in 2014.

研究分野：哲学

 キーワード：行為論 価値論 形而上学 ポール・グライス 構成主義 行為と出来事 ドナルド・デイヴィッドソン
 理性と価値

1. 研究開始当初の背景

(1) グライス (Paul Grice, 1913-88) は最晩年 (1986) に行為論「行為と出来事」(Actions and Events) を発表して、デイヴィドソン (Donald Davidson, 1917-2003) の行為論を真っ向から批判するが、この論文はデイヴィドソン陣営からは完全に無視される。グライスによると、デイヴィドソンは行為者因果性を出来事因果性に、意図・意志・理由を欲求・信念・判断に置き換えようとした。このような方向性は、グライスの目には、合理性の概念、目的ないし終極性の概念、そして価値の概念を理解不能にするものと映る。グライスの考え方は、「理性論」(Aspects of Reason, 1976, 1977, 1979) を経て 1980 年代のはじめには、とりわけ価値の概念をめぐって、デイヴィドソンとはかなり異なる地点に達していたと思われる。

(2) デイヴィドソンにとって「価値」とは、恐らくは「自然的な能力」としての欲求の相関者としての「自然的価値」以外にはないと思われる。他方、グライスにとって問題は、自然的な能力として合理性の能力を持つようになったヒトが「本質的に理性的」な存在である人間になるということはどう理解するかであったと言えよう。この点に関連して印象的なのは、「意味再論」(Meaning Revisited, 1982) の第3節 (後年付加された部分) の記述である。そこでグライスは、「価値」の概念は合理性の概念ないし合理的存在者の概念にとって不可欠であるということ、また合理性を自然主義的に特徴付けることはできないということを言っている。それは、合理性の概念は目的ないし終極性の概念を前提にするからであり、また、合理性の能力を最終的に「自然の目的を実現するための自然的な能力の一部」として位置付けることはできないからである。

2. 研究の目的

(1) グライス行為論の生成過程と意義を明らかにすることが本研究の目的である。グライスは、デイヴィドソンが行為者性の本性に関する問いに取りかかる際に、彼は二つの要素が区別できることを示唆していると言う。その第一のものは、能動性の概念である。行為において行為者は能動的である。生じてくるものは、彼によって生じてくるようにされる何か、彼がその原因となる何かである。第二のものは、目的、計画、ないし意図の概念である。生じてくるものは、それが生じてくることを彼が意味したあるいは意図したから生じてくるのである。以上のように考えることは、実質的に正しいように思われるとした上で、「差し当たり、以上二つの要素が示すと思われることは、行為者性と意志の間の密接な関係である」とグライスは言う。そして、「ここでデイヴィドソンと自分は別々の道を歩むことになる。それは、いわゆる意志の働きに対する彼の敵意のせいである」と付け加えている。

(2) デイヴィドソンはもともと「意図」とか「意志」という概念に懐疑的であった。「行為者性」(Agency, 1971) という論文のある箇所に付された註には、「この箇所およびこれ以後の箇所において、私は、行為者性の分析を意図の概念あるいは意図を伴う行為という概念、あるいは行為における理由の概念の分析から始める方法はすでに却下された、と仮定している。これらの概念は、少なくとも部分的には、出来事因果性によって分析可能である」とある。デイヴィドソンの戦略は、「意図すること」(Intending, 1978) の末尾によれば、意図・意志・理由には背を向けて (無視して) 「よりなじみ深い (familiar)」欲求と判断に専ら目を向けることにするというものである。グライスはこれを「あべこべ (upside down)」と表現している (Reply to Davidson on 'Intending', 1974)。

(3) これに対して、グライス自身が向かう

方向については、「行為者が典型的な仕方であるいは行為の代用品を通して行為する場合、彼がすることは彼がその原因であるような何かである。このことが、行為者性の概念の核心をなす」と言っている。しかし、その「原因」という語の解釈に注意を払う必要があるとして、次のように言う。「私たちは、近年哲学において事実上必須となった類のその語の使い方（すなわち、出来事に関連する機械論的でヒューム的な概念の見本例）から転じて、アリストテレスと親和性があったはずの方向へと向かう必要がある。私たちが営む行為には目的がある。その目的には、更なる目的があるかもしれないし、ないかもしれない。また行為の目的は、アリストテレスが考えていたように、それがその行為の目的である、行為の期待される結果ないし成果であるかもしれない。あるいはまた、それ自身がある行為の目的なのだが、それ自身はその行為と同じ、あるいはそれとは異なる行為であるかもしれない。ある人に、特定の行動計画によってかなえられる何か優先的な目的がある場合、彼にはその行動計画を実行ないし実現する理由がある。そしてもし彼にはその行動計画を実行する理由があるからその行動計画が彼によって実行されるのだとしたら、その行為は彼がその原因となる何かであり、また彼にはその行為を実行する理由があったという事実によってその行為は（予言によるのではない仕方です）説明されることになる。」これがグライス行為論の核心部分であると思われる。行為論における「原因」と「目的」、そして「理由」の位置づけを明確にする必要がある。

3. 研究の方法

(1) 1967年3月、グライスはハーバードでの講義「論理と会話」が終了すると、いったんオックスフォードに戻るが、半年後の9月には慌ただしくパークレーに単身赴任する

ことになる。グライス自身がパークレーに移ることにした表向きの理由として挙げているのは、意味論の形式化を進めるためというようなことだが、額面通りには受け取りにくい。グライスの示唆するところを理解するヒントは、その後のグライスとデイヴィドソンとの関係にあると思われる。それが理由の半分で、もう半分は、イギリスと違ってアメリカでは何でも自由にできそうだったということ理由だと思う。オックスフォードではたぶん形而上学はできなかったのではないが。グライスは1970年代に、アリストテレスとカントの倫理的著作を好んで演習と講義の題材として取り上げている。その成果の一つが、倫理的遺稿「道徳をめぐる考察」(Reflections on Morals, 1970-5)である。全体は、序章を含む全19章プラス(「意志の弱さ」をめぐるデイヴィドソンの議論を批判する)補遺1章という、タイプ原稿にして500枚近くある膨大なものである。表紙が付された遺稿全体の前に、概要を述べるタイプ原稿30枚のOne framework for Reflections on Moralsが置かれている。グライスはパークレーに移ってやりたいことができるようになったのだと思われる。この間の経緯を明らかにする必要がある。

(2) グライスはパークレーに移ると、グライスとデイヴィドソンの間には「意図 intention」ないし「意志 will」をめぐる、次第に亀裂が深まっていくように見えるやりとりが生じることになる。グライスはパークレーに赴任した1967年秋、デイヴィドソンはノースカロライナ大学チャペルヒル校において、How is Weakness of the Will Possible? (1970)の元になる原稿を口頭発表している。グライスはこれをわざわざ聞きに行ったらしい。しかし、グライスは既に(数年前に?)別の考え方を展開する方向に一步踏み出していて、後にそれはブリティッシュ・アカデミーにおける講演原稿 Intention

and Uncertainty (1971) として結実することになる。二人のやりとりはその後、グライスの未発表原稿 Reply to Davidson on 'Intending' (1974)、デイヴィドソンの「意図すること」(Intending, 1978)と続く。そして、グライスの側からするとその集大成が本書に収録した行為論 Actions and Events である。興味深いのは、このやりとりの間に、それと並行してグライスの関心が次第に「広がりと深まり」を見せるようになっていくように思われることである。実際には、グライスの未発表原稿「デイヴィドソンの『意図すること』について」は、デイヴィドソンの「意図すること」に対する応答として、デイヴィドソンの口頭発表に続いて、1974年10月の同じ日にチャペルヒルで口頭発表されたものようである。しかし、デイヴィドソンの自伝的記述 Intellectual Autobiography (1991)には、チャペルヒルでの論戦についての記述がまったくない。何ごともなかったということなのか、それとも思い出したくない悪夢のような何かであったのか、定かではない。グライスにおけるその後の理性論・価値論・行為論の展開と、この間のグライスとデイヴィドソンの足取りの違いを明らかにする必要がある。

4. 研究成果

(1) グライス晩年の理性論・価値論・行為論の展開については、拙訳『理性と価値 後期グライス形而上学論集』(2013)の「訳者解説」に詳しく述べた。グライスが到達した地点は、とりわけ「理由」をめぐる、デイヴィドソンの立ち位置の対極にあることは明白である。ここでは今後の展開可能性について述べる。遺稿 Reflections on Morals の前文 One framework for Reflections on Morals は、はじめの方に「ケーラス講義」(1983)への言及があるから、最晩年のものかもしれない。そのある箇所ではグライスは、自身の形而上学的思索と価値論と道徳に関する考察は重なり合うというようなことを言っている。このような地点へとグライスを導いた思索の動因と言えるものは二つあったと思われる。一つは、上で述べたデイヴィドソンに対する「関心」である。他の一つはオックスフォード(ヘーアー派)の、というよりは、現代の倫理学に対する不満である。

(2) デイヴィドソンに対する議論の焦点の一つは方法の問題である。グライスはクワイン・デイヴィドソンの自然主義路線(科学主義的・還元主義的傾向)に対して、次第に焦点が明確になっていく仕方で論陣を張っていく。現代アメリカを代表する二人が同じ穴のむじなであるということについては、クワインの証言(1991)とそれに対するデイヴィドソンの「光栄の至り」とする応答(1991)がある。グライスのデイヴィドソンに対する議論の最終的な到達点は、形而上学を『靈魂論』と『ニコマコス倫理学』を架橋するものと理解するという主張であると考えられる。

(3) グライスの現代倫理学に対する不満の要点を言えば、アリストテレスとカントを正当な仕方で理解していないということであろう。グライスの念頭には結局は常に『ニコマコス倫理学』があって、現代において『ニコマコス倫理学』の議論をやり直すというのが遺稿 Reflections on Morals の目的であったと思われる。Reflections on Morals は、大きく三層に分けることができるように思われる。1) A-G (Introductory を含む)は、時期が不明のものもあるが、大部分は1972-4に準備されたもので、議論の出発点(First Stage)として位置付けられるものであろう。2) H-N は一度(何度か?)やり直されている。各論考のそれぞれの論点は、後のジョン・ロック講義等の主要テーマである。3) P-S もそのほとんど

が(たぶん何度か)やり直されているが、('Appendix'を除いて?)その後主要テーマとはならなかった。ある種未展開のままに終わった部分かと思われる。実は、Rだけが1975年の日付を持つ。Oがなぜないのかは分からない。しかし、以上のような分析(直観?)は十分なものではないかもしれない。グライスの念頭には『ニコマコス倫理学』があったことは明白なのだから、もっとあからさまに『ニコマコス倫理学』との比較を試みるべきかもしれない。その結果、いくつかの変容(違い)を指摘できるようになるかもしれない。例えば、1)徳論の哲学的心理学への変容、2)正義論の欠如ないし理性論への変容、3)幸福論の変容(位置付けの違い)、というような、今後の研究テーマの非常に魅力的な候補になり得る問題群である。

<引用文献>

Davidson, D., How is Weakness of the Will Possible?, delivered to University of North Carolina Colloquium at Chapel Hill, October 1967; in J.Feinberg ed., *Moral Concepts*, Oxford: Oxford University Press, 1970; and in Davidson, *Essays on Actions and Events*, 1980, pp.21-42.

- Agency, in R.Binkley ed., *Agent, Action and Reason*, Toronto: The University of Toronto Press, 1971; and in Davidson, *Essays on Actions and Events*, 1980, pp.43-61.

- Intending, delivered to University of North Carolina Colloquium at Chapel Hill, October 1974; in Y.Yovel ed., *Philosophy of History and Action*, Dordrecht: D.Reidel Publishing Co., 1978; and in Davidson, *Essays on Actions and Events*, 1980, pp.83-102.

- Intellectual Autobiography, in L.E.

Hahn ed, *The Philosophy of Donald Davidson*, Chicago: Open Court, 1991, pp.3-70.

Grice, P., Reflections on Morals, H.P. Grice Papers, BANC MSS 90/135 c, The Bancroft Library, University of California, Berkeley, 1970-5.

- Intention and Uncertainty, *Proceedings of the British Academy*, 1971, pp.263-79.

- Probability, Desirability, and Mood Operators, H.P.Grice Papers, BANC MSS 90/135 c, The Bancroft Library, University of California, Berkeley, 1972.

- Reply to Davidson on 'Intending', delivered to University of North Carolina Colloquium at Chapel Hill, October 1974; H.P.Grice Papers, BANC MSS 90/135 c, The Bancroft Library, University of California, Berkeley.

- Some Reflections about Ends and Happiness, delivered to University of North Carolina Colloquium at Chapel Hill, October 1976 (*Aspects of Reason* 第5章) .

- The Immanuel Kant Lectures (Aspects of Reason), delivered to Stanford University, 1977.

- The John Locke Lectures (Aspects of Reason), delivered to Oxford University, 1979.

- Meaning Revisited, in N.Smith ed., *Mutual Knowledge*, London: Academic Press, 1982; and in Grice, *Studies in the Way of Words*, Harvard: Harvard University Press, pp.283-303.

- The Carus Lectures (The Conception of Value), delivered at the annual meeting of the American Philosophical Association Pacific Division, 1983.

- Actions and Events, *Pacific Philosophical Quarterly* 67, 1986, pp.1-35.

- Reply to Richards, Final Section: Metaphysics, Philosophical Psychology, and Value, in R. Grandy and R. Warner eds., *Philosophical Grounds of Rationality*, 1986; and in Grice, *The Conception of Value*, 1991, pp.93-120.

- *The Conception of Value*, Oxford: Oxford University Press, 1991.

- *Aspects of Reason*, Oxford: Oxford University Press, 2001.

岡部 勉編訳, 『理性と価値 後期グライス形而上学論集』, 勁草書房, 2013.

Quine, W.V., Where Do We Disagree?, in Hahn ed., *The Philosophy of Donald Davidson*, 1991, pp.74-9.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

長友 敬一, プレオネクシアという欲求, 『ギリシャ哲学セミナー論集』11, 査読有, 2014, pp.29 -40.

東谷 孝一, 行為・習慣・自然本性 トマス・アキナスの場合, 『保健科学研究誌』第12号, 熊本保健科学大学編, 査読無, 2014, pp.101 -8.

長友 敬一, 相対主義の変遷, 『熊本学園大学文学・言語学論集』第20巻第1号, 査読無, 2013, pp.1-46.

東谷 孝一, しるしと知 アウグスティヌス『教師論』, 『西日本哲学年報』21, 査読有, 2013, 37-55.

岡部 勉, 行為と出来事 行為論再考, 『西日本哲学年報』20, 査読有, 2012, 63-83.

長友 敬一, ポール・グライスにおける価値の実在と絶対性, 『熊本学園大学文学・言語学論集』第19巻第2号, 査読無, 2012,

pp.1-16.

[学会発表](計4件)

岡部 勉, グライス晩年の形而上学的思索 グライス vs デイヴィッドソン 意志をめぐる, 西日本古代哲学会, 2014年11月3日, 福岡大学セミナーハウス.

長友 敬一, プレオネクシアへの志向, ギリシャ哲学セミナー, 2013年9月14日, 東洋英和女学院大学.

長友 敬一, 論理と志向 プラトン『ゴルギアス』と『国家』, 西日本古代哲学会, 2012年4月28日, 福岡大学セミナーハウス.

東谷 孝一, しるしと知 アウグスティヌス『教師論』, 西日本哲学会, 2012年12月2日, 別府大学.

[図書](計1件)

岡部 勉編訳, 『理性と価値 後期グライス形而上学論集』, 勁草書房, 2013, 327頁.

[その他]

長友 敬一, P.グライス著・岡部勉編訳『理性と価値 後期グライス形而上学論集』, 図書新聞3153号, 2014年4月5日.

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡部 勉 (OKABE Tsutomu)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号: 50117339

(2)研究分担者

長友 敬一 (NAGATOMO Keiichi)

熊本学園大学・経済学部・教授

研究者番号: 20352396

東谷 孝一 (HIGASHITANI Koichi)

熊本保健科学大学・保健科学部・准教授

研究者番号: 30274400